樋口一葉入門（三）

植村邦正

An Introduction to Ichiyô's Works (3)

Kunimasa UEMURA

まえがき

前々稿の入門（一）では，一葉の学歴・教養の大略と，一葉と和歌との関係を述べ，小説の解説では，初期の作品五編と中期の作品二編を述べた．前稿の入門（二）では，中期の作品四編と後期の作品二編を述べた．本稿では，それ以後の作品九編について解説しようと思う．

各作品のところで，本文の素材となっている古典・和歌・漢詩文や俚諺・俗語・俗謡等を煩を厭わず列挙したのは，それによって前・中・後期の文体の特徴を知ることができるからである．

⑭ 軒もる月

（梗概）午後九時ごろ，お袖は職工をしている夫の帰りを待ちわびている．破れ窓の障子をあけて外を見ると寒月が美しい．そのとき，ふと，かって僅かの間小間使いとして仕えた頃かわいがられた桜町の殿様のことを思い浮かべる．身を引いてからも，十二通もの手紙をいただいている．そんなことを思うと矢も楯もたまらず，葛籠（つづら）の中からそれらの手紙を出して一通二通と夢中で読みはじめる．

そのうち，つめたい風にふと我にかえり，この寒空を自分ら妻子のため，遅くまで働く夫のありがたさを思い，今見た夢のことを恥じ，今まで大事にしまっておいた手紙を粉々に破り，火にくべてしまう．そして今の自分の愚かさが身に泌み，我と我をあざ笑うのであった．空を見れば，軒もる月に風の音がすがすがしい．

○「文学界」の客員戸川残花にすすめられて執筆した明治28年の作品．

この明治28年は，師半井桃水や「文学界」関係者の紹介もあり，新聞・雑誌に作品を載せる機会が多く，それだけ執筆意欲も出て，作品も多く，晩年を飾ることとなった．

○ お袖の青春時代の描写は，「文学界」の青年作家達の浪漫主義の影響もあって抒情的な面を持つが，すぐ現実にもどって，理性的な描写になるのは，一葉が単なる抒情作家ではなく，堅実なリアリズム作家であるからである．

○ 本文に関係のある俚諺・古典など

・女に家なし（女三界に家なし）・空中の楼閣　・心の雲　・神も御照覧あれ

・百八煩悩　・二心をいだく

・今はさながら天人も，羽なき鳥のごとくにて，上（のぼ）らんとすれば衣なし（謡曲・羽衣）

⑮ ゆく雲

（梗概）甲斐国の地主に拾われ，そこの養子となった野沢桂次（22才）は故郷を離れ東京遊学中だが，養父清左衛門病篤く，家督相続のため，帰郷しなければならなくなる．国には，野沢家の一人娘でお作（17才）という許婚も待っている．外見では人もうらやむしあわせ者のようだが，さて…….

東京では養家の縁につながる上杉家に寄宿する．そこにはおぬひ（17才）という娘がおる．桂次は，継母に責められながら，けなげに働くこの娘をやがて愛するようになる．

帰郷の日も迫り，桂次は，養家を捨てても，おぬひと添い遂げようとまで思い，せつない胸のうちを娘に訴えるが，娘は身分をわきまえてか，親せきへの義理のためか，ただ「淋しくなりますわ」とばかりで，それ以上さっぱり煮え切らない返事をしている．

男心はわからないもの――国へ帰った桂次からは，あれほど愛していたはずだのに，おぬひへの便りも日ごとに減って行く．おぬひは行く雲の帰らないように諦めの日々を淋しく送っている．

○　気位高く，仕えにくい継母の気嫌を取り，桂次から言い寄られても自己の身分を忘れぬ，かしこい，世故にたけた，おぬひの性情は，一葉の妹邦子がモデルだという．

○　桂次の養父清左衛門の住所が甲斐国山梨郡中萩原村（現塩山市）となっているが，これは一葉の父則義の生まれた土地をそのまま用いたもの．この作品を書くにあたり，父や祖父八左衛門のことが脳中に去来したことであろう．

○　本文に関係のある俚諺・詩歌・俳句・物語など．

ここに詩歌の引用が多いのは，悲恋の情を美しい語句や修辞を用いてあらわそうとした歌人一葉の特徴があらわれたもの．

・足下から鳥が立つ　・飛ぶ鳥あとを濁さず　・腸（はらわた）を断つ　・一生は夢のごとし
・男心と秋の空　・三分七分のかねあひ　・物の数ならず
・塚も動けわが泣く声は秋の風（芭蕉）
・巴峡秋深し，五夜の哀猿月に叫ぶ（和漢朗詠集・巻下・猿）
・塩の山さしでの磯にすむ千鳥君が御代をば八千代とぞ鳴く（古今七賀・読人知らず）
・桜花咲きにけらしなあしびきの山のかひより見ゆる白雲（古今一春上・紀貫之）
・春の夜の夢の浮橋とだえして峰に別るる横雲の空（新古今一春上・藤原定家）
・ちぎりきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山浪越さじとは（後拾遺十四恋四・清原元輔）

⑯　うつせみ

（梗概）雪子（18～9才）はさる由緒ある家柄の一人娘である．彼女には兄様と呼び馴れた，正雄という許婚があったが，運命のいたずらか，彼女は植村録郎という男と相思相愛の仲となる．

録郎は，雪子が兄様と呼ぶ男が，実は彼女の許婚であることを全く知らなかった．それを知った録郎はショックのため自殺してしまう．あとに残った雪子は，あわれ気が狂って，老父母・正雄の顔も見分けられないようになり，「わたしが悪かった．許婚のことを申さなかったために貴方を殺してしまった」とむせび泣くばかりの日々であった．

彼女の親たちは，家柄に傷のつくのをおそれ，人に知られぬように転々と居をかえ，入院もさせないで日を送っている．

○「うつせみ」という題名は次の和歌によったものだが，恋人を失った雪子が蝉のぬけがらのように腑抜けた状態にあることを象徴的にいった．

空蝉はからを見つつもなぐさめつ深草の山けぶりだに立て（古今十六哀傷・僧都勝延）

○　娘に対する愛情よりも，家の体面を重んずる旧弊な世相を批判的に描いている．人間より家柄を重んずる封建社会を非とし，個性・自我の解放を求める浪漫主義の思想を是とする「文学界」同人等の影響が大きい．

○　本文に関係のある俚諺・古典など

・埒もない　・二の足を踏む　・思案投げ首　・駟馬も追ふ能はず（説苑）

・花は盛りに月は隈なきをのみ見るものかは（徒然一三〇段）

⑰　にごりえ

（梗概）新開地の銘酒屋，菊の井の一枚看板のお力は，客に媚びることもなく，わがままに振舞うが，それでいて不思議と人気のある女であった．しかし，その胸の中には人に言われぬ悩みがあり，どこかニヒルな淋しさが漂っていた．あるとき，ふと呼び入れた客の結城朝之助に心ひかれ，逢う瀬を重ねるうち，お力はいつか彼を頼るようになる．

ある月の夜に，お力の元の情人である蒲団屋の源七が尋ねて来た．お力も彼に愛情を感じているが，それだけに相手の家庭をこわすまいと決意して会わずに帰してしまう．お力恋しさの源七は，落ちぶれ果てても，今なお彼女を忘れかね，誠実一筋の世話女房のお初の忠告も耳に入らない．中に立つお力は，つくずく今の商売が嫌になるのであった．

朝之助が来たある日，お力は求められるまま，身の上話をはじめる．「私は，もとはといえば，三代伝わっての出来そこねで，そのため，こんな浮気女になったのです」といいさしてあとは無言．

あるとき，源七のこどもの太吉がお力から菓子を貰って帰ったことから，お初が怒り出し，夫婦げんかの挙句，お初は追われるようにして太吉を連れて家を出ていってしまう．あとには源七ただ一人．

魂祭も過ぎて幾日か経ったころ，ここ新開の町に源七がお力を殺して自分も死ぬという事件がおこった．これは無理心中ではないか，いや合意の上の心中だなどと口うるさい世間雀の噂であった．

○　本作品執筆当時の住所丸山福山町の近隣を舞台に描かれている．

○　お力のモデルは，一葉家の隣の銘酒屋鈴木亭の酌婦お留である．菊の井は鈴木亭がモデル．社会のドン底で短かい生涯を終えた，一人の孤独な誇り高い女――お力の姿は，いつ窮死するかも知れぬ一葉自身の象徴と見ることができる．

○　「三代伝わっての出来そこね」（第六章）とお力に言わせているのは，一葉自身の家の過去三代の人々に，それぞれ狂気の一面があったことを指す．祖父は漢学に凝って俗世を忘れ，父は士族の系図買いに没頭した．一葉兄妹のうち，長兄泉太郎は若くして結核で死亡，次兄虎之助は陶工として度はずれた名人気質で世にいられなかったこと，また一葉自身の死の影におびえる坐折感等を指したもの．

○　結城朝之助の人柄・風采・態度等は半井桃水のそれを念頭において書かれたもの．

また金銭上の相談者で占師の久佐賀義孝の人物像も陰に陽に投影している．

○　はじめてお力と会った結城朝之助が，大尽風を吹かせ，茶屋総出で送り出される所は，紅葉の「三人妻」（明治25）の中で，初めてお才と会った余五郎が茶屋を出る所の描写と酷似する．

○　文章・内容ともに露伴の「五重塔」（明治24～25）の影響が大きい．特に「にごりえ」のの源七と「五重塔」の十兵衛の家庭描写のところはよく似ている．

○　お力・源七の心中の解釈については，合意説・無理心中説・お力自身の合意・翻意・合意の三段がえし説がある．このうち，三段がえし説については，一旦情死を承知したお力が，瀬戸際で翻意した心理のなかに，一葉の体験から来る「恋は厭うべきもの」という意識が潜在しているのだとする．これについては「入門（一）」の「一葉と和歌など」で述べた「厭はるる恋」のところ参照．

○　題名は伊勢集の次の二首からとったといわれる．

にごりえのすまむことこそ難からめいかでほのかに影をだに見む

「すまむ」は「澄まむ」と「住まむ」とを掛けた．（歌意）濁江が澄むということはむつかしいのであろうが，どうかして，ほのかにあなたの姿だけでも映してみたいものだ ――― 一緒に住むことはむつかしいであろうが，何とかしてあなたの姿だけでも見ていたいものだ．

すむことの難かるべきに濁江のこひぢに影のぬれぬべらなり

「すむ」は「住む」と「澄む」を，「こひぢ」は「小泥」と「恋路」とを掛けた．（歌意）濁江の澄むということはむつかしいように，一緒に住むことはむつかしいだろうから，恋の涙のため影も濡れてしまいそうだ．

○　本文に関係のある俚諺・俗謡・俗曲・古典・俳句など

他の作品と違い，俗曲・俗謡等が多く出てくるのは，明治の中期色街に住んだ一葉が実地に耳にしたものを，目新しさにそのまま本文中に取り入れたものであろう．

・かくなる上は何をつつまむ，我こそは中納言家持が嫡孫，天下を望む大伴黒主とは俺が事だわい（常盤津・積恋雪関扉）
・お医者様でも草津の湯でも惚れた病は治りゃせぬよ（草津節）
・あら玉の，霞の衣衣紋坂，衣紋つくろふ初買の，袂ゆたかに大門の花の江戸町京町や（清元・北州千歳寿）
・わが恋は細谷川の丸木橋，渡るにゃ怖し，渡らねば，思ふお方に逢はりゃせぬ（端唄）
上の端唄の原歌は，平家物語九巻「小宰相身投」の章に出ている．すなわち，
わが恋は細谷川のまる木橋ふみかへされてぬるる袖かな
・紀伊の国は音無川のみなかみに，立たせ給ふは船玉山，舟玉十二社大明神（端唄）
・馬鹿にしやんすな昔は花よ，鶯なかせたこともある（都々逸）
その他の俚諺・古典・俳句等はほかの作品と同じように多い．
・玉の輿に乗る　・棚おろしをする　・幅を利かす　・鬼か蛇か　・泥の中の蓮
・逆鱗に触れる　・降って湧いたやう　・話し半分嘘半分　・尻目にかく
・焼棒杭に火がつき易い　・縒がもどる　・袖すり合ふも他生の縁　・鼻の先であしらふ
・嘘つきは閻魔様に舌を抜かれる　・九十九夜の辛棒（謡曲・通小町）
・蛇食ふと聞けば恐ろし雉の声（芭蕉）

⑱　十　三　夜

（梗概）貧乏士族斎藤主計の娘お関は，古風なつつましい女性で，原田勇という羽振りのいい官吏に望まれて七年前に嫁いでいったが，夫が余りにも冷酷無情なのに堪えかねて，ある夜のこと夫の留守の間に無心に眠っている幼児の太郎に切ない別れを告げ，これが最後と無断で実家に帰って来た．丁度その日は十三夜で，いそいそと迎える両親の様子を見ては，ついそれと言い出しかねていたが，そのうれい勝ちな様子を怪しんだ父親に促され遂に思い切って，実はかくかくと始終を話し離縁をと哀願した．お関の訴えを聞いては娘の言い分至極道理と側か

ら母親もいきり立つが，さすがに父親はそれをたしなめ，つらくもあろうがと因果を含めてお関を説く．彼女もそれを聞いては強いてとも言えず，かつまた愛児の上をも思いやり，すべてを不運とあきらめ，力なく夫の家へ帰って行く．その途中で乗り合わせた車屋は，思いもかけず幼馴染の高坂録之助であった．だんだんと話しを聞くと，自分のために自棄をおこし，妻子をすておちぶれた生活をしているとのことであった．しかし今さらどうなることでもなく，お互い万感胸に迫る思いで別れて行くのであった．

○　家という重荷を背負った妻であり母である女が，この社会をいかに生きるべきかの問題を取り上げた．

○　暗に封建的な男性社会への抗議をしていると受け取ることができる．

○　詠嘆調が基調となり，全体的に，なかんずく最後のところは情趣あふれる結末をなしている．彼女の作品中最も詩味あふれるもの．

○　一葉の長姉ふじの不幸な結婚がこの小説に投影されている．

○　原田勇のモデルは，一葉との婚約を破棄した渋谷三郎であるとされる．

○　本文に関係のある俚諺

・針のむしろに居るやう　・下へも置かぬやう　・気を引く　・油をとる
・うしろに目なし　・臍（ほぞ）をかためる　・親はなくとも子は育つ　・親の光は七光
・火のついたやう　・悪妻は六十年（百年あるいは一生）の不作

⑲　こ　の　子

（梗概）私が今の旦那様，裁判官の山口登と結婚したのは三年前．山口は無口で，外でおこった出来事など何も話してくれないのに腹を立て口も利かない．客があっても女中任せで挨拶にも出ない．いやだ，いやだ，一口離縁すると言われれば，直ぐにでも家を飛び出す勢いで，女中達にもあたり散らした．

それが半年前，子どもが出来てからというもの，すっかりかわってしまった．子どもがかわいくてならない．その子が夫にもにこにこ接するのを見てとたんに我が非を悟った．こちらから気持よく接すれば，相手も同じように接してくれるものだ．

それからは親子三人仲むつまじい家庭をとりもどした．子に教えられるとはこのことだろう．

○　他の作品と違い，独白調の言文一致体（「ます」調）で書かれている唯一の作品．

○　作中の山口登は，かっての許婚者渋谷三郎がモデル．

○　本文に関係のある俚諺など

・遮二無二　・一つ迷へば万（まん）迷ふ　・女は口さがなし（俚言集覧）　・木で鼻を括（くく）る
・悪妻は百年（六十年あるいは一生）の不作　・風上にも置けぬ　・棚へ上げて置く
・三歳児（みつど）に浅瀬を教へらる

⑳　わ か れ 道

（梗概）町内の仕立物などをして独り淋しく裏屋住居をしているお京（20才ばかり）の許へあけくれ話しに来る傘屋の小僧吉三（きちぞう）（16才）という男がおる．彼は不幸な孤児で，仕事にかけては腕ききのしっかり者だが，並はずれて背が低いため人から馬鹿にされるので，自棄（やけ）気味になっている．しかし，若い小意気なお京へ目をつけて出入りする者の多い中で，親身に近づいて来るのは吉三だけであった．自然お京も彼を弟のようにかわいがった．よるべのない二人は夜更けまでよく互いの不運をかこちあった．

出入りする男どもの中にお京を妾にしようとする者があった．吉三は前からそんな事を承知するなと止めていた．お京も気が進まぬままに迷ったが，味気ない今の身を考えて，いっそ妾奉公に出ようと決心してしまう．年も押し迫った別れの夜，吉三は諦めの眼に涙をためてお京をじっと見つめるのであった．

○　お京と別れねばならぬ吉三の悲痛な叫びを描写した所が強い印象を与える．

○　一葉が生活費を借りようと観相家の久佐賀義孝を訪ねたとき，わたしのお妾になったら毎月の生活費を出してやろうと言われ，一時は激怒するが，貧ゆえの余りの苦しさにいっそ妾にと半ば考えた事もあった時の心の乱れがお京の行動に投影している．

○　文体においても，「わかれ道」は他の作品と違う．「わかれ道」では文章の最初と最後がともに会話文になっているが，こういう例は他にはない．ちなみに「にごりえ」は書き出しのところだけ会話文になっている．また「この子」が全部言文一致文になっている所からみて，今まで露伴流の雅俗折衷文をかえようとしなかった一葉が，紅葉その他の人々の文体に一歩近づこうとしたあとの伺われるのは興味がある．

○　「わかれ道」と紅葉の「心の闇」（明治26）と類似点が多い．

○　中の章の「桂川の幕が出る時はお半の背中（せな）に長右衛門（でう）と唱はせて……」は，菅原専助の世話浄瑠璃「桂川連理柵（れんりのしがらみ）」のうち，「桂川道行」のくだり「桂の川水に浮名を流す二人づれ，お半をせなに長右衛門，あふせそぐはぬあだ夢を……」を踏まえ，それを茶化した表現である．

○　本文に関係のある俚諺

・火の車　・火の玉のやう　・かぶとをぬぐ　・木の股から生まれたやう
・独活（うど）の大木柱にならぬ　・馬には乗ってみよ，人には添うてみよ
・山椒（しょう）は小粒でもぴりりと辛（から）い　・待ては甘露（かんろ）の日和（ひより）あり

㉑　裏紫（うらむらさき）

（梗概）西洋小間物店の小松原東二郎の妻お律は，ある夕，女文字の手紙を受け取り落ちつかない．実はかっての恋人吉岡からの呼び出しの手紙であった．お律は姉が心配事があるので相談に乗ってほしいと言って来たと夫をいつわり，それを真にうけた人の好い夫にせき立てられるようにして家を出る．

あまりの夫の善良さに一旦はわが身の罪がかえりみられて「行くまいか」と思いまどうが，次の瞬間，自分は嫁入前から吉岡さんを心の夫と決めていたのだ．見つかって離縁されても構わないと度胸をきめて吉岡の家を尋ねる．

上巻は以上で終わるが，下巻は吉岡の家の情景から書きはじめる予定であったらしいが，病気のため完結せずにおわっている．

○　桃水への思慕が日ましにつのり，前に「雪の日」を書いたが，この作品にも，母や妹にかくれ，心の寄り所を求めて必死に桃水を訪ねる一葉の心の動揺が投影されていることは，彼女の日記を見ればはっきり分かる．

○　この作品では女性のあり方について他の作品と大分違っている点を見出す．

他の作品の女性は，大部分が貧しい，すべてを運命とあきらめるような，封建制のしみこんだあわれな女性が多いが，この編では積極的な意志（よかれ悪しかれ）・自我を持つ女性を描こうとしている．

夫の支配に甘んじない，自己の世界を持つ女性を描くとか，男にだけ解放されている愛や性を女性のためにも解放しようとするとか，多分に「文学界」同人の自我拡張思想の影響が見ら

れる.

○　本文に関係のある俚諺など

・心の鬼が身を責む　・舌三寸に胸三寸　・舟をこぐ　・剣の刃(つるぎ は)を渡る　・袖にする

・天にも地にもかけがへない

㉒　わ れ か ら

（梗概）お町は，このごろの外泊がちな夫のことを思うと，眠れないままに屋敷うちを歩きまわり，灯りのもれる書生の千葉の部屋をおとずれて男を驚かしたりもした.

さて，お町の，今は亡き父親の金村与四郎はもと小役人であった．妻のお美尾は夫に満足しないで，虚栄にあこがれ，お町を産むと間もなく家出をしてしまう．怒った与四郎は心機一転鬼の与四郎と呼ばれて巨富をなし，お町を残して五十に足らぬ生涯を終える.

お町が成人して聟に迎えた金村恭助は今政界に活躍している．お町は家つきの妻として夫の恭助に甘えて暮らしていたが，子宝のない上に，外出がちの夫の留守の心許なさに悩んでいる．折柄，夫の誕生日で，多くの来客にうんざりし，お町はざわめきを避けて庭に下りると，他の女の絃(いと)に合わせて夫の歌う声が聞こえる．その折感じたなぜとも言えぬ淋しさを，あとで夫に訴えても夫はただ笑っているだけだった.

その後，夫に妾腹の子のあることを，下女たちが噂話ししているのを小耳にはさんだ時も時，夫から「いい子が居るから貰わないか」と言われ，てっきりこれは妾腹の子だと思い込む．そうした物思いから来る癪(しゃく)を，その度に介抱してくれるのは律気な千葉であったが，度重なるにつれ，変な噂も立つようになり，夫から別居を言い渡され，千葉も負い出される．ひとりぼっちになったお町の心こそあわれであった.

○　前半は尾崎紅葉の「金色夜叉」(明治30・1・1～35・5・11　読売新聞連載)に似るが，これは制作年代からみて「われから」(明治29・5・10　文芸倶楽部発表）の方が半年ほど早い発表になる.

○　後半は封建的な男性に苦しめられる女性の悲劇として見ることもできるし，「にごりえ」と同じく親の因果が子に報いるという血筋の問題を取り扱ったとも見ることができる.

○　本文中に次のような浄瑠璃・歌舞伎等が取り入れられているのは，これらのものが明治中期に娯楽演芸や音曲などとして流行していたことを示す.

「お前の父さん孫右衛門さん」(第八章）は，大罪人となった忠兵衛が遊女梅川を連れての故郷への道行きで，実父孫右衛門に出会ったとき，梅川の発したことば.

「今宵小梅が三味に合はせて勧進帳の一くさり」（第九章）の「勧進帳」は歌舞伎十八番の一つ。

「播磨が近い所へかかっている」(第十二章）は，上方の井上播磨のじょうの浄瑠璃節が近くの小屋にかかっていることを言ったもの.

○　題名は次の和歌から取った.

あまのかる藻にすむ虫のわれからと音(ね)をこそ泣かめ世をば恨みじ

（古今十五恋五・典侍藤原直子朝臣）

「あまのかる藻にすむ虫の」は「われから」を出すための序詞.「われから」は海草に付着している甲殻の小動物であるが，和歌では「我から(自ら)」の意の掛詞として用いることが多い.（歌意）みんな自分から起こったことと思って泣きこそしようが，世を恨んだりなどはすまい.

○　俗伝に「われから」という虫は，月に浮かれて貝を出て泳ぎまわる中に蟹などに殻を横

どりされるという．従って女主人公のお町が養子の夫から家を追い出されるという筋にふさわしい題名．

○　本文に関係のある俚諺・和歌・川柳など

・朱に交はれば赤(か)くなる　・世間見ず（あるいは，世間知らず）　・生血(いきち)を啜(すす)る
・舌を巻く　・我を折る　・元も子も失ふ　・天にも地にもかけがへない　・三すくみ
・知らぬは亭主ばかり　・草鞋(わらじ)をはく　・うはの空　・水に流す　・提灯と釣鐘
・あごをはずして笑ふ　・雲にかけ橋，霞に千鳥　・恋に上下の隔てなし
・恨み骨髄に徹す　・後指(うしろゆび)をさされる　・奥歯に物がはさまったやう　・鼻薬をかがす
・あとは野となれ山となれ
・天の原踏みとどろかしなる神も思ふ中をばさくるものかは（古今十四恋四・読人知らず）
・つれづれと空ぞ見らるる思ふ人あまくだりこむ物ならなくに（和泉式部集・恋）
・女房の思ふほど亭主もてもせず（川柳）

――完――